

第 62 回ジェンダーセッション

「日本の社会経済的变化と男性性の変容—『草食系男子』『オタク』『ネトウヨ』」

(お茶の水女子大学教授・熊谷圭知先生) 開催レポート

豊田由貴夫 (立教大学観光学部教授・ジェンダーフォーラム所長)

第 62 回ジェンダーセッションは、お茶の水女子大学の熊谷圭知氏をお招きし、「日本の社会経済的变化と男性性の変容—『草食系男子』『オタク』『ネトウヨ』」と題して講演をしていただいた。熊谷氏は人文地理学が専門で、長年パプアニューギニアを対象として研究をされているが、最近は日本の男性性について広く研究や発表を行っている。講演に先立って熊谷氏は「プライベートなことは政治的なことである」という主張に沿って、小学 4 年生と 1 歳の二人の息子さんを持つという家族構成を明らかにし、自らのエフォート率（これは最近、研究者間で使われる表現で、自分の全エネルギーのうちどれくらいをその業務に投入するかという割合を示すものである）は研究教育が 40%、家事育児が 40%であるという自分の立ち位置を表明された。さらには異性愛であるということを「カミングアウト」した上で、大きな変容を遂げつつある今日の日本の男性性について講演していただいた。以下は講演の概要と私（豊田）からの感想めいたコメントとなるが、講演内容の紹介についても文責は豊田にある。

熊谷氏によると、日本の高度経済成長期、日本の男性は長時間労働で企業に奉仕し、一家の稼ぎ手としてのアイデンティティを持っていた。一方女性は「専業主婦」として家事・育児を支え、同時に女性の労働はあくまでも「パートタイム労働」として家計の補助的役割に留め置かれた。しかし高度経済成長が終焉しバブル経済が崩壊したことにより、こうした男性とそれに伴う家族のモデルは崩壊した。そして 2000 年代以降、新自由主義的な経済改革に伴って派遣法の改正が行われ、雇用者にとってフレキシブルな労働が得られるような社会構図が生み出される。このような社会経済的变化によって、高度経済成長期にあったような男性モデルは今や成立しなくなった。そして現在、注目されているのが、「草食系男子」、「オタク」、「ネトウヨ」という 3 つのタイプの若者像であるという。

これら 3 つの概念は既に十分語られているのだが、その特徴を確認しておく。「草食系男子」は、その定義は人によって微妙に異なるが、恋愛・性的交渉において積極的ではない男性を指し、インドアホビーや近場への旅行を好むといった傾向を持っている。女性は草食系男子をどのように見ているのかは興味深い問題であるが、お茶の水女子大学でのアンケートによると「友人としては好感を持つが、恋人・パートナーとしては不安・不満」であるという。

80 年代ごろから登場した「オタク」は、今日では文化的にも経済的にもメジャーな存在となった。一般的に生身の人間よりもヴァーチャルな対象へセクシュアルな感情を持つとされ、熊谷氏によるインタビューでも、理想を追求するあまり生身の女性ではなく虚構の

女性を追い求めるといった側面がうかがわれるという。

3 つめの「ネトウヨ」は、近年ネットを中心に広がっている、ナショナルな価値に共感を寄せる層である。彼らに見られるのは、自分たちは弱者で何かを奪われているという感覚を持っていることであり、そこから生まれる自分の居場所と承認への希求が、ナショナルな動きにつながっていると分析されるという。

熊谷氏によればこの 3 つのタイプは、現代日本の男性性を表しているのだが、そのすべてではないし¹⁾、またそれぞれが独立した類型でもない。相互に重なる部分があり得るという。

そしてこれらの 3 つの層は、日本経済の構造変化が階層・階級的分化をもたらすのに伴い、その中で「弱者」となる男性が自己確認をどこに求めるかという時に、「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」という選択肢として生まれているという。これらのまったく異なるようにみえる 3 つの層は、実は「内向性」や「他者の欠如」という共通の特性を持つ。またそこにインターネットの影響や、グローバル化が進む中での男性性の危機といった現象を見出すこともできる。

彼らのうちの一部に、現在のジェンダーに関連する考え方を变える可能性を見出すこともできるが、一方で、内向きであること、自己承認を閉ざされた場所に求めること、また特にネトウヨに見られる、外国人や女性といった固定的な他者を構築し排除することで自己確認を果たすという傾向は、問題をはらんでいると言える。

自己を構築するためには生身の他者が必要であり、他者の変化に伴って自己を変容させることが必要となるのだが、彼らにはそのような自己を揺るがす他者が欠けている。新たな他者との対話をつうじて、自己の向上を果たせる場所をどう作るかが今後の課題であり、それが可能となれば、この 3 つの新しい男性性がダイナミックで解放的なものに代わっていく可能性があるのではないか、というのが熊谷氏の結論である。

非常に今日的なテーマだったので、会場はほぼ満席となるほど多数の聴衆が集まった。講演の後、フロアからは活発な質問や議論が投げかけられた。3 つの男性性のうち「草食系男子」にポジティブな面を見出す意見があったし、3 つの男性性に対してそれらをメディアによって構築されたものではないかと疑問視する意見もあった。また「草食系」と「オタク」が同じ方向性を持つものに対して、「ネトウヨ」は異なる方向性を持つものであるとし、同列に論ずることへ疑問を投げかけるなど、様々な意見が聞かれた。

今回の話における現代日本の若者をめぐる社会的状況の把握については、私も熊谷氏とほぼ同様な把握をしている。3 つのタイポロジーについては、これがすべてではないという前提を受け入れるならば、私も大きな異論はない。また「弱者」となる男性が自己確認をどこに求めるかによって「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」という選択肢が生まれているという議論は、現代日本の若者像をめぐる状況を理解しやすいという点で評価できる。日本が階層・階級的に分化していく中で、希望を一定のレベルに保とうとして上昇志向を

無くすのが「草食系」であり、趣味の世界に走るのが「オタク」、自分よりも「弱い」層を攻撃することにより自己確認をするのが「ネトウヨ」という考え方は非常にわかりやすい。

ここでは、2つの感想めいたコメントを付け加えておくことにしたい。ともに講演後の質疑応答では出なかった話題である。

1つは、社会的な弱者となった男性が自己確認をしていく際にこのような3つのタイポロジーがあり得るが、社会的弱者となる女性も多数存在するはずであり、彼女たちはどのように自己確認をしようとするのか、それはタイポロジーとして示せるのだろうかという点である。

熊谷氏の議論は男性性に関わるものなので、この点は無関係なものになってしまうのだが、議論を女性に発展させるとどうなるのだろうかという興味はある程度、必然のものである。「草食系女子」という概念は可能だし、「オタク」は女性にも同様な傾向を認めてもよいだろう。ネトウヨに関しては男性に限定する必要はないし、「愛国女性」²⁾という存在も考えられている。ただし女性の場合はタイポロジーとしては男性ほど明確に出ないかもしれない。また女性の社会的「弱者」としての性格は、親と同居している場合は男性ほど表面化しにくいかもしれない。

もう1つのコメントは、熊谷氏の議論は現代日本の「都市部」に当てはまる議論であり、「地方」では当てはまりにくいのではないかという点である。あるいは地方では別の若者像があるのではないかということである。

熊谷氏の議論では3つのタイポロジーに共通した志向として、異性としての女性への志向性が希薄であるという点が指摘された。確かに「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」という層は女性への関心があるにしても、結婚しそうなという想像はつく。特に「オタク」の場合はそうである。これにより現代日本における結婚率の低下も説明できるかもしれない。

しかし都道府県別の結婚の率を見ると、傾向としては「地方」の方が結婚の率は高く、都市部では低い傾向がある。もっとも生涯非婚率が高いのは東京である。結婚は経済的要因が関わるとされ、男性の収入が低いと、稼ぎ手として期待されることもあり結婚しにくいと言われている。しかし、地方では男性の収入が低いにも関わらず、結婚の率は高いのである。もちろん地方は物価が安いので相対的な収入は決して低くないと考えられるし、土地や住居などのストックの資産があればフローとしての収入は地方ではそれほど必要ないので、収入の影響はさらに低くなると考えられる。

そして、結婚の率に収入があまり重要でないと考えれば、地方で結婚の率が都市部より高いのには別の要因を考える必要があり、候補に挙がるのは、地方では伝統的なジェンダー観が強く、そのために結婚が促進されるという可能性である。このような伝統的ジェンダー観を持つ若者は、「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」という若者像とは重なりにくいであろう。これに加えて、地方における「ネット環境への消極的関わり」、「都市文化からの忌避」³⁾などの傾向を考えると、地方の若者像は「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」

とはあまり重なり合わないと考えられる。そうすると「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」というのは都市部の若者像であり、地方にはあまり存在しない、あるいは地方には別の若者像があるのではないかということになる⁴⁾。

以上 2 点を、私の感想めいたコメントとして示した。ここで述べたのは実証的なデータを裏付けとして示した議論ではなく、あくまでも議論の展開の可能性を示したコメントにすぎない。熊谷氏の議論もその後、新たな若者像のタイポロジーを付け加えていてさらに発展しているようなので、今後も議論は深まらるだろうと期待している。

- 1) 熊谷氏にはその後、私がコーディネーターを務める「現代社会とジェンダー」の授業でゲストスピーカーとして講演していただいたが（2014 年 12 月 14 日）、そこでは現代日本の若者像に「イクメン」というもう一つのタイポロジーを付け加えている。
- 2) 北原みのり・朴順梨 2014 などを参照。
- 3) 地方では都市文化に対する強いあこがれがあるとも考えられるが、その志向を持った人々は都市に移住しており、残った者は都市文化に対する無関心があるとも考えられる。
- 4) 評価は定まっていないが、地方に居住する若者に対して「ヤンキー」や「マイルドヤンキー」という概念が示されている（五十嵐太郎 2009, 難波功士 2013）。「マイルドヤンキー」とは、かつては「不良」「ツッパリ」などの用語で呼ばれた層に近いが、現在ではアウトローの側面は少なくなっており、「地元志向」、「学校文化からの排除」、「伝統的ジェンダー観」などによって特徴づけられる層であり、地方（あるいは都市近郊）に見られるとされる。この「マイルドヤンキー」は「ネット環境への消極的関わり」、「都市文化からの忌避」などの特徴により、「草食系」、「オタク」、「ネトウヨ」とはほとんど重なり合わない層と考えられる。都市が結婚を促さない環境であるのに対して、彼らは伝統的ジェンダー観を持ち、早婚、早産である。

参考文献

- 北原みのり・朴順梨『奥さまは愛国』河出書房新社, 2014
五十嵐太郎『ヤンキー文化論序説』河出書房新社, 2009
難波功士『ヤンキー進化論 不良文化はなぜ強い』光文社新書, 2013